

## 躍動するバンコク、ハノイへ

### 経営学部笠原ゼミ研修旅行



▲ 最後列左端が斎藤くん。  
2列目右から2人目が藤川さん。

「国際ビジネス戦略」を研究テーマにしている経営学部・笠原伸一郎ゼミでは、今夏、タイのバンコク近郊とベトナムのハノイ周辺の企業を訪問した。その体験記を紹介しよう。笠原教授は「研修旅行は、10年ほど前から東南アジアを中心に行っていますが、例年強制参加ではないのに、ゼミ生のほとんどが参加しています。発展著しい中国・東南アジアでのビジネス活動のグローバル化を見聞し、肌で現地の人々と接することは、文献にない成果が得られるはずで」と話している。



▲ スポーツ用具メーカーであるモルテンの工場を見学(バンコク)

### 勤勉に働く女性の姿が印象的

斎藤 直輝(経営3)

タイでの工場見学では、バンコクのサハグループ工業団地のモルテンとサハ・セーレンを訪ねました。スポーツ用具のモルテンでは、ボール(サッカー、バスケット、バレーボールなど)が製造される工程を見学。アテネ五輪でも製品が採用された企業で、その製造現場を目にすることが出来ました。ここでは、女性の働く姿が多く見られました。有能な女性は、幹部になるチャンスもあるそうです。

自動車シート製造のサハ・セーレンでは、日本のノウハウである独特のプリント技術のビスコテックスを導入しています。ビスコテックスは、コンピュータを使ってデザイン製作をする技術で、コスト(時間)を大幅に削減出来、今後、IT技術が発達していけば、それに伴ってさらに進化すると思われます。企業としての強みを持つことの重要性を肌で感じ、とても貴重な見学でした。

ベトナムでは、トヨタ、住友系のドラゴンロジスティックス、デンソー、住友ベークライト、TOTOといった日本企業の工場を見学。どの企業でも、ベトナムの人々に日本人のサービスという精神を理解してもらうことに、苦勞しているようでした。トヨタの工場内には、「カイゼン」とかかれた日本語スローガンが張ってありました。ハノイでも多くの女性が働いていました。男性よりも作業を勤勉にこなしているのは、米国とのベトナム戦争時、女性が労働力だったことも影響しているようでした。

国が変われば文化も変わり、考え方も異なる。そのギャップをどのように埋めていくかが重要な問題です。生産現場を実際に見ることで言葉や文化が違う国で乗り越えなくてはならない壁があることを、理解出来ました。また、両国で進んでいるトヨタの国際戦略を目にしたことも得がたい経験です。有意義で貴重な研修旅行となりました。

### 異文化マネジメントの重要性

藤川 美保(経営3)

タイ、ベトナムへの研修旅行では、異国の文化や歴史に触れると共に、世界のグローバル化がかなり進んでいることを実感しました。

最初にタイのバンコクを訪れました。食べ物のマーケットや人々の往来が非常に多く、とてもにぎやかな町でした。

何よりも私を一番驚かせたのは、バンコクのインフラの状態です。かつてタイは、発展途上

のとても貧しい国でした。しかし現在は、町中にトヨタやホンダといった日本車が走り、高速道路や地下鉄などの交通機関も発達していました。インフラが整備されたことによって、海外の企業が進出し、雇用が創出されるようになり、国は発展してきたのだと改めて感じました。

次に訪れたベトナムのハノイの街の姿は、また違ったものでした。街中が一世紀前の日本のような印象を受けました。店の前ではたくさんの人々が話しこんでおり、とてものんびりした生活を営んでいました。

ベトナムの人々は、非常に勤勉な印象を受けました。共産党の一党支配ということもあり、宗教争いなどなく、気質は日本人に似ていると感じました。最近、日系企業がこぞって進出してきているようです。空港からハノイに行く途中、トヨタ、三菱商事、デンソーといった日本の有名企業の看板をみかけました。

こうして考えると、文化の違いというのは、国や宗教、言葉によって大きく変わってくるのだと思いました。グローバル化とは、世界規模で経済、経営活動の相互依存化が進んだ状態のことであると改めて感じました。文化の違いというものを常に考えて、マネジメントしていかなければならないことを痛感し、異文化マネジメントの重要性を再認識した旅でもありました。

【ニュース専修2004年10月号4面】

## 国際ワークキャンプのリーダーを体験

信じることで試練乗り越える – 海外研修・国際交流奨励制度を利用してフィリピンへ

吉川さやか(経済3)

NPOの国際ワークキャンプのリーダーとしての経験を通じて、幸せや平和について考え、発信し、キャンプという小さな集団の中に平和なつながりを作ること。それらを実践すべく、9月の2週間、フィリピンへ行ってきました。

日本人21人とフィリピン人7人のキャンパーと共にマニラから車で6時間北上したパンガシナン州スワルにある児童擁護施設「子どもの家」の建設手伝いをしました。

それだけ多くの人間が集まっているのですから、さまざまな価値観や文化の違いがあり、それぞれの見ている方向の違いから一時キャンパーの心が大きく割れた時がありました。しかし、意見を一つにするのではなく違いを認め合うこと、受け止め合うこと、それらを諦めずに何度もぶつかり合おうとしたことで、バラバラだった皆の心は、最後にはあるところで一つになれました。それは目に見えるものではありませんでしたが、皆の表情や感覚を通じて感じる事が出来、何より私は信じることの大切さを学びました。バラバラなキャンパーを感じ、現状を見せつけられてはどうしたらいいか分からず苦しくなりもしましたが、相手を、自分を信じようとしなければ、自分自身が止まってしまう、つながりを作りたいという自分の目標にもたどり着けないことに気付き、そうなりたくない一心で、意識して「信じること」、そしてその上で行動することを続けました。

さまざまなフィリピンの側面にも触れた中で最も印象的だったのは、ゴミ捨て場でゴミを拾って生活する人や「子どもの家」で一緒に働いたワーカーさんからも感じた、今ある状況を楽しむ姿勢です。幸せかどうかは、それぞれが決めるものであり、他人が量れるものではないと実感しました。また今回、鶏を締める経験をしました。日本では、「鶏肉」になったものを買うので、忘れがちだった「命をいただく」ということ、「いただきます」の意味を改めて深く感じました。

今回最も感じたことは、人として根本的に大切なことは、シンプルであるということでした。愛する気持ち、理解する、認め合う、信じる、感謝する……。キャンプを通じて大切にしていたこれらを、日本の生活に戻ってからも忘れずにいたいと思います。

【ニュース専修2004年10月号4面】